

日本における韓国語教育に関する研究

—大学の韓国語学習者調査にみる現状と課題—

朴 珍希¹

本稿は、岡山県立大学の韓国語学習者アンケート調査を通じて、韓国語の教育方法の向上と学習者中心教育のための方向を考察した。新しい授業カリキュラムの構成と学習者中心教育の一つの方法として、韓流コンテンツ及びeラーニングシステムの導入・活用と、これらによる言語と文化のコラボレーション教育を提案した。また、eラーニングシステムの活用が授業外の学習時間活用のための学習支援コンテンツとして定着されるためには、新しい学習支援コンテンツの開発がもっとも重要であることを主張した。

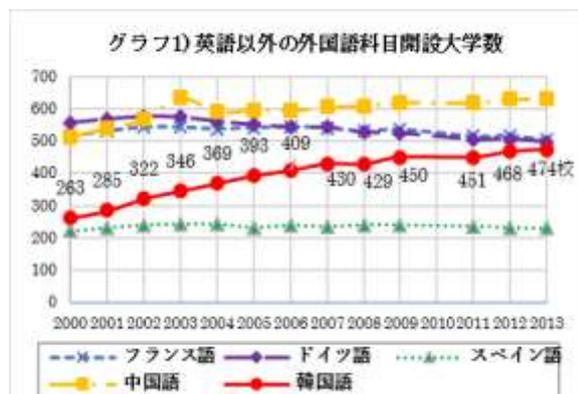
キーワード：教養韓国語教育、アンケート調査、韓流コンテンツ、eラーニング、言語と文化のコラボ教育

1. はじめに

日本における韓国語教育は、1984年日本の公営放送NHKがラジオ・テレビで「ハングル講座」を始めたことによって韓国語学習の大衆化が始まり²、2002年大学入試センター試験の外国語科目として韓国語の導入、同年サッカーワールドカップ日韓共同開催が起爆剤となり、「韓流」という流行語まで生み出す両国間の友好的な雰囲気の中で、韓国語教育の需要の増加につれ韓国語教育を実施している大学も大幅に増えた。一方で、「突然の量的膨張により、その発展に対応する内的能力の強化が行われず、諸問題を抱えている」と指摘されている³。

2. 日本における韓国語教育の現状

2.1. 教養外国語科目として韓国語

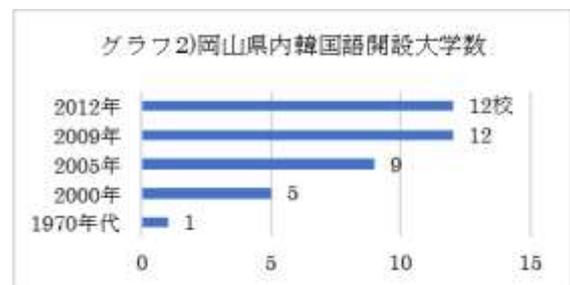


(国際文化フォーラム(2005)の2000年の資料と文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室2001～2013年調査資料により作成：2010年度は調査無し)

日本の大学における英語以外の外国語科目開設大学数についてまとめたグラフ1)をみると、2013年現在、韓国語を開設している大学は中国語、フランス語、ドイツ語に続き4番目に多い。中でもとりわけ韓国語の増加率が際立つ。韓国語教育を実施している大学数は、2000年は263校であったが、継続的に増え、2013年では2000年の1.8倍に相当する474校になっている。

2.2. 岡山県立大学の韓国語教育

筆者はかつて岡山県内の大学における韓国語教育の状況について報告したが(朴珍希(2013))、グラフ2)で韓国語教育を実施している大学は、1970年代は1校、2005年は9校であったが、2012年12月現在、岡山県内17校の4年制大学⁴のうち12校(約70%)であることを確認した。それにつれ学習者も大幅に増加し、2012年は年間3225名が学習した。

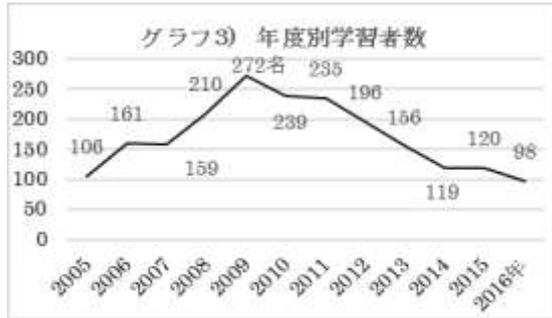


(朴珍希(2013)の調査を元に作成)

岡山県立大学(以下、本学)の韓国語教育は、「第1次韓流ブーム」⁵の時期である2005年4月選沢科

目として初級レベルの「基礎韓国語Ⅰ・Ⅱ」を前期・後期に分けて週2コマ(1コマ90分授業)開講し、2011年に1コマが増え、現在は3コマである。

グラフ3)の本学の年度別の学習者数をみると、2005年開設時は年間106名であったが、その後急増し、「第2次韓流ブーム」が始まる2009年は272名で2005年の2.6倍となった。しかし「第2次韓流ブーム」の年を境目に学習者数は減少しつつある。



3. 先行研究及び研究目的

これまでの日本の大学における韓国語教育に関する研究は多数あるが、学習者ニーズに関する研究は比較的に少ない⁶⁾。表1)は「第2次韓流ブーム」以降現在までの学習者ニーズ分析に関する研究結果である。各項目は応答者数が最も多かった事項を主に載せている。これらの先行研究結果をみてみると、学習動機はほとんどが「韓流」で、「第2次韓流ブーム」以降も学習者への韓流の影響は相変わらず大きい。学習目的は、研究結果によってばらつきがあるが、日常生活や旅行の時に役に立つ簡単な「会話能力」で、学習目標については「入門」が多い。授業時間以外の学習時間はほとんどないが、音楽、ドラマなどの「映像やインターネット」で学習していることが分かる。一方、韓国語学習時の難しく感じる領域は「発音」である。学習難易度、韓国語関連検定試験の受験・韓国留学の希望有無に関する項目は教育内容や教育目標を決めるのに非常に役に立つが、資料は十分ではない。授業への要望は、「会話中心の授業」であるが、授業への映像活用を好む。

以上、「第2次韓流ブーム」以降の日本の大学における韓国語教育の研究結果をみてみたが、調査期間が少し異なりはあるとは言え、ほぼ似たような結果が出ている。特に、「第2次韓流ブーム」以降の調査項目にも韓流コンテンツが深く関わっていることか

表1) 学習者ニーズ分析研究結果 (2010~2015年)

	梁正善 (2010)	다나키 (2012)	심보 (2012)	강영숙 (2014)	박종후 (2014)	오기노 (2015)
動機	興味・面白さ・韓流	興味・韓流	韓流・易しい	韓流	興味・旅行	韓流・易しい
学習目的	旅行・交流	字母区別・挨拶表現	会話・挨拶表現	第2言語習得		単位取得・旅行
アンケートレベル			入門・初級		入門	中級
調査項目		ドラマ・音楽	映像	映像・インターネット		映画・ドラマ・音楽
難易度	難しい					難しい
難しい領域	発音		文法・発音			発音・聞き取り
試験				可能なら		希望無し
留学				希望無し		希望無し
授業要望	会話・韓国文化		会話・映像活用			映像音楽活用・会話

ら、大学側は韓流コンテンツを活用した会話中心の韓国語教育について考慮する必要があると思われる。しかし、先行研究ごとに設問項目や選定にばらつきがあり、研究結果を一般化することは難しい。さらに、学習者が映像を活用した会話中心の授業を希望するという結果から学習者のニーズに合わせた授業

カリキュラムの再構成や教育方法の見直しなどの指摘はあるものの、具体的な提案などはない。

本稿では、以上のような先行研究を踏まえ、大学における韓国語教育の現状や学習者ニーズを把握し、その結果を参考に、今後の韓国語教育及び教育方法を改めて考えることを目的とする。

4. 学習者アンケート調査概要と分析結果

4.1. 調査の概要

本稿のアンケート調査は、2016年7月末前期の授業修了後に実施した。調査内容は、性別・学年・専攻などを含む基礎項目と、学習動機・学習目標・授業への要望など韓国語学習の全般に関する事項、そして学習を通じて得た韓国（人）と韓国語のイメージ・難易度など、3つに構成した。アンケートに応じた学習者は、「基礎韓国語Ⅰ」の3クラスの履修者51名（男性12名（23.5%）、女性39名（76.5%））である。3クラスのうち2クラス13名、1クラス38名を韓国語ネイティブ教員2名がそれぞれ担当した。

4.2. 基礎項目の分析結果

学習者の所属別は、情報工学部13名（26%）、保健福祉学部33名（64%）、デザイン学部5名（10%）であり、詳しくは表2)にまとめた。本稿で提示するパーセンテージはすべて四捨五入で計算した。

学部	学科	人数(名)	%
情報工学部 (13名)	情報通信工学科	7	14
	人間情報工学科	6	12
保健福祉学部 (33名)	栄養学科	16	31
	保健福祉学科	16	31
	看護学科	1	2
デザイン学部 (5名)	造形デザイン学科	3	6
	デザイン工学科	2	4
合計		51	100

表3)のように学習者はほとんど1年生である。

学年	人数(名)	%
1年生	47	92
2年生	4	8
合計	51	100

表4)をみると、学習者の90%は英語以外の外国語に触れたことがない。10%の外国語学習経験者が既に学習した言語は中国語であると答えた。

経験	人数(名)	%
あり	5	10
なし	46	90
合計	51	100

表5)で分かるように、84%の学習者は韓国語学習経験がなく、16%の学習者は大学入学前に既に韓国語学習経験があると答えた。入学前の学習形態は主に歌(K-POP)・ドラマ・映画などであると回答したが、このような韓国文化コンテンツは、入学後の学習動機にも影響を与えたと思われる。

経験	人数(名)	%
あり	8	16
なし	43	84
合計	51	100

表6)をみると、学習者84%は韓国滞在経験がなく、既経験者の滞在期間は平均4日である。

経験	人数(名)	%
あり	8	16
なし	43	84
合計	51	100

表7)で、学習者94%は韓国語研修や留学経験がなく、4%の既経験者の滞在期間は平均4日である。

経験	人数(名)	%
あり	2	4
なし	48	94
無回答	1	2
合計	51	100

4.3. 学習者ニーズ分析結果

韓国語教育課程や教育目標は、学習者ニーズ分析結果に基づいて設定しなければならない。特に、学習者の「学習動機」、「学習目的」、「学習目標」は教育課程や教育目標設定でもっとも重要である。

4.3.1. 韓国語の学習動機

まず、韓国語の「学習動機」に関する調査結果、表 8)をみると、旅行や韓国文化関連の「韓国へ旅行に行った時に役に立つと思うので」21%と、「K-POP・韓流(スター)に興味があるので」19%が多く、次に「習いやすいと聞いたので、周りから勧められたので」14%、「韓国語に興味があるので」13%順になる。将来性や単位関連の「将来、役に立つと思うので」と「単位がとりやすいと思うので」は10%未満にとどまる。つまり、韓国語学習は就職や学業と関連する実利的な動機ではなく、韓国旅行に役立つという個人的な趣味の上での実用性と韓国文化・韓国語への興味という統合的な動機が主な学習動機であることが分かる。これは大学入学前の学習経験者の学習形態が主に韓国文化コンテンツであることと関連性があると思われる。さらに、「韓国語に興味があるので」「近い国のことばを習いたいのので」のように、全体の23%が韓国語自体への興味を持ち韓国語学習を始めたことは、教養としての韓国語教育において何よりも重要な学習動機であろう。

表 8) 学習動機 (複数選択可)	人数 (名)	%
K-POP・韓流(スター)に興味があるので	21	19
ドラマ・映画を字幕なしでみたいので	8	7
韓国語に興味があるので	14	13
将来、役に立つと思うので	8	7
近い国の言葉を習いたいのので	11	10
韓国旅行の時に役に立つと思うので	23	21
知り合いに韓国人・在日コリアンがいるので	4	4
単位がとりやすいと思うので	3	3
習いやすいと聞いたので、周りから勧められたので	16	14
特別な理由はない	2	2
合計	112	100

4.3.2. 韓国語の学習目的

次は、韓国語の「学習目的」に関する調査結果、表 9)をみると、会話能力を目的にする「韓国旅行」23%と「コミュニケーション」22%、卒業のための「単位取得」20%、「趣味」18%の順になる。「韓国留学」や「将来の就職」という実利的な面より、会話能力という実用的な面を追及するが多い。外国語の授業と言えば一般的に、コミュニケーション

と結びつける傾向がある。韓国語を教養外国語科目として学習する場合は、期待されるのはコミュニケーション能力とどれほど韓国語が上手に表現できるのかという実用性に価値を置くので、学習目的の期待値はあまり高くない。

表 9) 学習目的 (複数選択可)	人数(名)	%
コミュニケーション	21	22
文化・歴史などに関する知識	10	10
単位取得	19	20
趣味	17	18
将来の就職	3	3
韓国旅行	22	23
韓国留学	4	4
合計	96	100

4.3.3. 韓国語の学習目標

次に、韓国語の「学習目標」の調査結果、表 10)をみると、「旅行に役立つ会話能力」が43%で圧倒的に多く、「日常会話に役立つ会話能力」22%、「教養外国語としての基礎知識程度」21%の順になる。3.の先行研究で既に指摘されているように、学習者のほとんどが実用的な会話能力を「学習目標」としていることは、教養としての韓国語の「学習目標」は決して高いとは言えない。

表 10) 学習目標 (複数選択可)	人数(名)	%
教養外国語としての基礎知識程度	16	21
旅行に役立つ会話能力	33	43
新聞や書籍が読める能力	3	4
日常会話に役立つ会話能力	17	22
ある程度のビジネスが可能な能力	2	3
手紙や SNS 交流が可能な能力	5	6
その他	1	1
合計	77	100

4.3.4. 現在の授業数及び希望授業数

表 11) 現在の授業数と希望コマ数			
現在の授業数	希望授業数	人数(名)	%
1 コマ	1 コマ	39	76
	2 コマ	11	22
	3 コマ	1	2
	合計	51	100

現在の授業数と希望コマ数についてまとめた表11)をみると、76%の学習者は週1コマに満足しているが、24%の学習者は週1コマ満足せず、週2～3コマを希望している。

4.3.5. 授業時間外の韓国語学習状況

ここでは、一週間の授業時間外の韓国語学習状況についてみてみる。表12)で授業時間外に自分で勉強している学習者は76.5%で、授業時間外学習については積極的であると言えよう。

	人数(名)	%
する	39	76.5
しない	12	23.5
合計	51	100

しかし表13)で、そのうち授業時間外の学習に費やしている時間は一時間以内である学習者は66%であり、多くの学習者は授業のみ参加し、授業時間外は自ら学習しようとしなことが分かる。

	人数(名)	%
30分以内	13	33
30分以上～1時間未満	13	33
1時間以上～2時間未満	4	10
2時間以上～3時間未満	1	3
3時間以上	0	0
無回答	8	21
合計	39	100

김수정 (2004) では、学習者の一週間の学習時間は「3時間以内」であると述べているが、授業時間外の学習方法については言及がない。授業時間外の学習形態の調査は、授業の延長線での学習意欲を高め、学習目標の期待値を高めると同時に、授業へのより能動的な参加のための学習支援の方法を探る重要な手段である。ここで、本学の学習者の授業時間外の学習形態である表14)をみると、「課題や予習・復習」が最も多く、「K-POPなどの音楽」、「映画・ドラマ」の順になる。多くの学習者が韓流コンテンツを利用することは、韓流コンテンツが韓国語学習に深く関与していることを示している。学習者の韓流コンテンツというメディア視聴が、学習であるか

どうかまでは分からないが、メディアの視聴が学習につながるようにするためのカリキュラムが必要である。また、授業外の学習環境の改善とともに学習成果の質的な向上を図るためには、「韓流コンテンツ」と「課題」をどのように結び付け活用するかについて考えなければならない。これらのキーワードの活用が、授業時間外の学習支援カリキュラムとして定着されると、学習者の学習意欲の向上はもちろん、より効果のある学習結果が期待できると思われる。「その他」には、「小テストの勉強」「韓国語村(韓国語学習支援)参加」などがある。

	人数(名)	%
塾などの語学教室	0	0
ラジオ・テレビのNHKハングル講座	2	5
韓国人との交流	2	5
映画・ドラマ	5	12
課題や予習・復習	15	35
K-POPなどの音楽	7	16
インターネット利用(YouTube・SNS)	4	9
その他	8	18
合計	43	100

4.3.6. 今後の学習計画

4.3.6.1. 今後の韓国語学習について

表15)の今後の韓国語学習について、ほとんどの学習者は今後も学習を続けたいと答え、今後の韓国語学習については非常に意欲的である。

	人数(名)	%
する	50	98
しない	1	2
合計	51	100

表16)の、今後も学習を続け到達したい学習レベルについては、39%の学習者は「初級まで」と答えたが、「中級まで」は51%、「上級まで」は4%である。

	人数(名)	%
初級まで	20	39
中級まで	26	51
上級まで	2	4
その他	1	2
無回答	2	4
合計	51	100

しかし、本学に設置されている韓国語のレベルは初級のみで、学内では中級以上の学習はできない。つまり、現実的に55%の学習者の要望に大学側は答えられないのが現状である。

4.3.6.2. 将来の韓国旅行及び留学について

表17)の将来の韓国旅行について、「行ってみたいと思う」と答えた学習者は84%である。

表17) 韓国旅行	人数(名)	%
行ってみたいと思う	43	84
行ってみたいと思わない	8	16
合計	51	100

一方、表18)の語学研修を含む留学については、「行ってみたいと思う」と答えた学習者は35%にとどまる。地理的な隣接性による文化的関心や親近感のため、韓国旅行については積極的であるが、よりまじめな学習を必要とする語学研修や留学については、消極的である。

表18) 語学研修・留学	人数(名)	%
行ってみたいと思う	18	35
行ってみたいと思わない	33	65
合計	51	100

4.3.6.3. 韓国語関連検定試験について

さらに、表19)の韓国語検定試験については、殆どの学習者は受けた経験がない。学習者92%が1年生で、大学入学後初めて韓国語を習い始めたことから当然である。

表19) 検定試験の経験	人数(名)	%
あり	1	2
なし	49	96
無回答	1	2
合計	51	100

表20)の韓国語検定試験の予定については、「受けてみたいと思う」と回答した学習者は22%で、韓国旅行や留学に比べ関心度は低い。本学の学習者にとって韓国語検定試験は実用価値や魅力を感じにくいものであると思われる。

日本における大学の外国語教育が英語中心という傾きになりつつある現状の中で、韓国語検定試験受験者への支援⁷⁾は、外国語への関心や学習モチベーションを高めると同時に、学習意識の向上、学習目標の向上へもつながり、満足する学習結果が期待できると思われる。

表20) 検定試験の予定	人数(名)	%
受けてみたいと思う	11	22
受けてみたいと思わない	26	51
無回答	14	27
合計	51	100

表21)の授業への要望についてみてみると、現在の韓国語授業に反映してほしい要望事項が「ある」と答えた学習者は8%であるが、「ない」と答えた学習者は90%で、ほとんどの学習者は現在の授業に満足しているという結果が出た。

表21) 授業への要望	人数(名)	%
ある	4	8
ない	46	90
無回答	1	2
合計	51	100

授業への要望が「ある」と答えた8%の学習者の具体的な要望事項を表22)でみてみると、韓流コンテンツ・余裕のある学習時間を求めている。

表22) 授業への要望内容
<ul style="list-style-type: none"> ・会話が分かりやすい 流行の音楽や映画、テレビをみたい。 ・ビデオの量を増やしてほしい。 ・ペースをもっとゆっくりしてほしい。 ・ハングル文字を覚える時間がもう少し欲しかったです。 本当に楽しい授業でした。ありがとうございました。

韓流コンテンツを現在のカリキュラムの中に取り入れるには、現在のカリキュラムの再構成が必要になる場合もあり、簡単ではない。このような学習者の要望を参考に、達成可能な教育プログラムの構築がより早く進行される必要がある。よって、関連するコンテンツの導入など柔軟性のあるカリキュラムにより、学習者のレベルに応じた学習環境が造成されたコミュニケーション能力と学習者中心の韓国語

教育を目指す方法としては、e ラーニングの導入・活用がある。これについては、5章でまとめる。

4.4. 韓国（人）及び韓国語に関するイメージ

ここでは、韓国（人）及び韓国語についてどのような印象を持っているのかについてみる。まず、表 23)の「韓国を代表するものは何ですか。」という質問に「K-POP・韓流スター」が38%で、次に「韓国料理」30%、「ハングル文字」21%の順になる。韓流ブームの原点とも言える「韓流ドラマ・映画」は「テコンドーなどのスポーツ」と同じく 0%で、伝統衣装の「チマ・チョゴリ」は 3%にとどまった一方で、「エステ・美容整形・化粧品」という美容関連項目が 7%を占めたのは興味深い。韓流ブームによるメディアコンテンツだけでなく、韓流スターとの関連項目も幅広く関心の対象になるということが分かる。

表 23) 韓国の代表(複数選択可)	人数(名)	%
K-POP・韓流スター	27	38
ハングル文字	15	21
チマ・チョゴリ	2	3
エステ・美容整形・化粧品	5	7
IT 関連	1	1
テコンドーなどのスポーツ	0	0
韓国料理	21	30
韓流ドラマ・映画	0	0
合計	71	100

4.4.1. 認識の程度

まず、韓国語学習以前の韓国と北朝鮮の民族と言語に関する知識の程度について調査した。表 24)で65%の学習者は韓国と北朝鮮が同じ民族であることを「知っていた」と答えた。

表 24) 同じ民族	人数(名)	%
知っていた	33	65
知らなかった	18	35
合計	51	100

表 25) では、59%の学習者は韓国と北朝鮮が同じ言語を使用していると「知っていた」と答えた。

表 25) 同じ言語使用	人数(名)	%
知っていた	30	59
知らなかった	21	41
合計	51	100

以上で、日本人学習者は隣国への関心や興味はあるものの、隣国への知識は深くないことが分かる。今後の韓国語教育は、言語教育を通じて韓国の社会・文化への理解度を深めるための文化教育とのコラボレーション教育を目指していく必要があると思われる。

4.4.2. 学習を通じたイメージ変化

ここでは、学習を通じて学習者が感じる韓国（人）及び韓国語に関するイメージ、韓国語の難易度について調査した。まず、韓国語の授業を受ける前と後で「韓国（人）のイメージ」に変化があるかどうかについて質問し、それぞれの理由について書いてもらった。表 26)をみると、イメージが「変わった」と答えた学習者は12名(23%)で、全員が「プラスイメージに変わった」と答えた。変わった内容は、「勉強熱心・積極的でとても優しく親切・いい人が多いいい国・物をはっきり言う・気が重そうな人が多いと思っただが、ビデオを見て変わった・ドラマではいつもケンカしているイメージだったが、実際は違うことが分かった・料理が美味しそう・文化を大切にしている」などと記述している。

一方、イメージが「変わっていない」と答えた学習者の元のイメージを見てみると、「キレイでおしゃれな人が多い・近い国で日本人と似ている・早口なイメージ・礼儀を大切にする・自分の意思をしっかり持っている・感情表現が豊かである・美意識が高い」などほとんどが良いイメージである。

表 26) 韓国(人)のイメージ		人数(名)	%
変わった	プラスイメージに	12	23
	マイナスイメージに	0	0
変わっていない		36	71
無回答		3	6
合計		51	100

しかし、「良い人もいるけど、日本人を嫌っている人がいるイメージ・良い人もいるけど、あまりいいイメージがない」と答えた学習者もいた。

このような学習者が感じる韓国（人）のイメージを参考にし、授業に活用することができれば、学習意欲向上、より高い学習効果が期待できると思われる。言語と文化が別々に存在しないことから、韓国語と韓国文化の教育がコラボレーション関係を持つ授業は、韓国語学習者にとって韓国語と韓国文化の同時受容という観点からも寛容的に働くはずである。

次は、韓国語の学習前と後で「韓国語のイメージ」に変化があるかどうかについて質問し、それぞれの理由について書いてもらった。その結果の表 27)をみると、イメージが「変わった」と答えた学習者は 35名(69%)で、肯定的な変化が否定的な変化より3倍以上多い。プラスイメージに変わった内容は、「思ったより簡単・日本語と似ていて習いやすい・会話が分かりやすい・親しみやすい・書きやすい・規則性があり習いやすい・記号に見えたものが読めるようになった・呪文のようなものに見えたのが理解できた・もっと勉強したくなった・身近に感じるようになった」などと記述している。一方、マイナスイメージに変わった内容は、「思っていたより難しい・パッチムが読みにくい・発音の変化が難しい・同じ読み方の単語が多い」などと記述している。

		人数(名)	%
変わった	プラスイメージに	27	53
	マイナスイメージに	8	16
変わっていない		15	29
無回答		1	2
合計		51	100

次は、学習を通じて学習者が感じる韓国語の難易度をまとめた表 28)をみると、35%の学習者が「普通」か「簡単だ」と答えたが、65%の学習者が難しく感じていることが分かった。学習動機の質問には、「習いやすいと聞いたので、周りから勧められたので」、「単位がとりやすいので」がそれぞれ14%、3%であったことと比較すると、韓国語の学習後は2倍以上の学習者が簡単だと感じるようになった。

日本語母語話者にとって韓国語は、文法体系が似ている点で他言語に比べ比較的ハードルは高くないと思われがちであるが、予想より多くの学習者が難しく感じるようになった。

	人数(名)	%
とても簡単だ	0	0
やや簡単だ	2	4
普通	16	31
やや難しい	28	55
とても難しい	5	10
合計	51	100

表 28)で「難しい」と答えた学習者は具体的にどの領域を難しく感じるのか、表 29)をみると、「語彙」27%、「発音」18%、「読解」18%の順で、リーディング領域を難しく感じる学習者が過半数である。初級段階での「読解」は簡単な文章の日本語訳になるが、18%も難しく感じることは、教育内容を十分理解していない証拠であろう。韓国語教育において学習者が難しく感じる領域については、今後より具体的な教育方法の研究が必要である。

	人数(名)	%
発音	10	18
語彙	15	27
聞き取り	6	11
文法の理解	5	9
会話	2	3
読解	10	18
作文	7	12
その他	1	2
合計	56	100

一方、「普通」、「簡単だ」と回答した学習者が簡単だと感じる領域は、表 30)のように「文法の理解」38%、「発音」26%、「会話」19%の順である。

	人数(名)	%
発音	14	26
語彙	6	11
聞き取り	1	2
文法の理解	20	38
会話	10	19
読解	2	4
作文	0	0
合計	53	100

予想通り「文法の理解」が一番簡単だと感じる学習者が多いのは、韓国語は日本語と文法体系の類似性であると思われる。「発音」については、「簡単だ」26%、「難しい」18%のようにどちらも割合が多いが、難しく感じるのは発音変化のルールで、易しく感じるのは漢字語の発音の類似性にあると思われる。

以上のように、日本における教養としての韓国語教育は、学問目的や特殊目的ではないので、現在韓国語の授業内容の45%を示す「文法中心」の教育ではなく、日常生活に役立つ会話能力を育てるための「会話中心」の教育が優先されるべきである。そして、学習者が難しいと感じる領域を補った授業内容が学習者に自信を高めると同時に、会話能力の向上を図ることができ、学習者が韓国(人)と韓国語に感じるイメージを参考にして授業に活用すれば、はるかに高い学習効果が期待できると思われる。

5. 学習者アンケート調査結果からの課題

5.1. 学習者アンケート調査結果から見えたもの

これまでにみたように、岡山県立大学における韓国語学習者の学習動機や研究目的は多様である。特に、韓流コンテンツとかかわる項目が多く、「第2韓流ブーム」が過ぎた現在でも韓国語学習者の学習動機に大きな影響を与えている。旅行や日常会話に役立つ会話能力を目標にする学習者が多く、希望到達学習レベルは本学に設置されていない「中級まで」と答えた学習者が一番多い。

今後の韓国語学習希望率と授業時間外の学習率は非常に高いが、学習時間は66%が週1時間未満である。授業時間外の学習形態として「宿題」、「韓流コンテンツ活用」といった点で、韓流コンテンツは現在の韓国語教育において欠かせない存在である。さらに、韓国語の授業により多くの韓流コンテンツや旅行関連資料の導入を求め、将来の韓国旅行には非常に積極的であるが、韓国語研修や留学、韓国語検定試験には消極的な姿勢を見せている。

日本人学習者にとって韓国語学習は全体的に大きな困難を感じるほどではないが、初級学習者には(音読時の)発音と語彙というリーディング領域に対する習得の難しさがある。また、隣国への興味・関心はあるものの、知識はあまり高くない。学習を通じて韓国(人)及び韓国語のイメージは肯定的な変化

の割合が多く、韓国語のマイナスへのイメージ変化には、予想通りリーディングに関する項目が多い。

それでは、以上のような韓国語学習者のモチベーションをより高め、効果のある教育をするにはどのような点を注視すべきであろうか。今までの研究では、学習者調査結果を通して日本の韓国語教育への問題意識はあるものの、問題解決に至る研究はあまりなされていない。

ここでは以上の調査結果を踏まえ、学習者の意欲を引き起こし、楽しく、かつ達成感が感じられる学習者中心(learner-centered)の韓国語教育になるための韓国語教育の方法や新カリキュラムの提案など方向性について考えてみたい。

5.2. 学習者中心教育への試み

効果的な言語教育のために一番重要なのは学習者の学習動機、学習目標、学習要望などに関する調査を基にした学習者中心教育課程の設定であり、学習者中心の教育課程の設定は目的別、国別、対象別にしなければならない。従って、日本の大学での教養としての韓国語教育は、学問目的や特殊目的の教育とは異なるカリキュラム、教育内容(syllabus)などを設定する必要があり、教授方法も日本という地域特性に合わせ変えなければならない。

そこで、学習者の授業時間外の学習などを支援するために、電子機器を利用したeラーニングシステム(以下、eラーニング)の韓国語授業への導入を提案する。eラーニングは、情報技術の発展により超高速通信網の利用率が増加したデジタル時代の学習者がコンピュータだけでなく、様々なモバイル端末で利用することができ、時空間を超え学習者自らの学習が可能であるという長所がある。英語教育におけるeラーニングの導入・活用は、既に定着しているようであるが韓国語教育への導入はあまり活発ではない。

筆者が韓国語教育に導入・活用したeラーニング、特に韓流コンテンツを用いた言語と文化のコラボレーション教育といったeラーニング活用結果については、朴珍希(2017a)に取り上げているが、eラーニングを活用した学習はワクワク感があり、楽しく取り組むことができたという学習者の意見が出ている。よって、韓流コンテンツ及びeラーニングの導入・

活用を韓国語教育における学習者中心教育の一つの方法として提案したい。また、eラーニングの活用が授業外の学習時間活用のための学習支援コンテンツとして定着されるためには、韓流コンテンツやeラーニングのような学習支援コンテンツの開発がもっとも必要である。

6. おわりに

本稿では、日本の大学での韓国語教育の学習者ニーズを把握して、どのような授業形態と教育が彼らの学習意欲を向上させ、さらに彼らの学習目標の達成に貢献できるのかを把握することを目的とし、岡山県立大学の韓国語学習者を対象にしたアンケート調査結果を分析した。その分析結果を踏まえて、学習者の学習意欲を高め、学習目標を達成させるための具体的な一つの教育方法として、韓流コンテンツとeラーニングシステムの導入・活用と、これらによる言語と文化のコラボレーション教育を提案した。

このような研究が、今後の日本の韓国語教育現場で、学習者中心教育とコミュニケーション能力中心教育のための参考資料となることを願う。

【参考文献】

- 高等教育局大学振興課大学改革推進室「大学における教育内容等の改革内容について」（2001年～2013年資料）、文部科学省
- 国際文化フォーラム(2005)「日本の学校における韓国朝鮮語教育-大学等と高等学校の現状と課題-」財団法人国際フォーラム
- 朴 貞淑(2014)「韓国語教育における授業アンケートに見るコミュニケーション」『語学センター研究紀要』12 岡山県立大学
- 朴 珍希(2013)「外国語としての韓国語教育の現状と展望-岡山県内の大学・高等学校を中心に-（1990年代～2012年）」『朝鮮語教育-理論と実践-』8 朝鮮語教育研究会
- 朴 珍希(2017a)「日本の大学における教養としての韓国語教育-学習者への調査結果をもとに-」『岡山大学教師教育開発センター紀要』7 岡山大学教師教育開発センター
- 梁 正善(2010)「日本語母語話者の韓国語学習者における意識調査研究-大学での韓国語授業を通して-」『長崎外大論業』14 長崎外国語大学

- 강영숙 (2014)「日本の大学の韓国語教育に関する研究」『日語日文学研究』89-2, 韓国日語日文学会
- 김수정 (2004)「日本の大学における韓国語学習者の要求分析-九州大学を中心に-」『国語教育』113 韓国語教育学会
- 박중후 (2014)「日本の大学での非専攻韓国語教育の現状調査」『言語と文化』10-3 韓国言語文化教育学会
- 심보 토모코 (2012)「日本の大学における教養外国語科目としての韓国語教育の課題」『韓国言語文化協育学会 第7回国際学術大会発表集』
- 오기노 신사쿠 (2015b)「日本の大学ない教養としての韓国語教育の発展方向研究」『第25回国際学術大会発表集』国際韓国語教育学会
- 오대환(2010)「日本における韓国語教育の問題点に関する理解」『国語学』57 国語学会
- 이희경(2006)「学習者要求分析を通じた日本の大学生の韓国語学習と韓流」『韓国言語文化』3-1 国際韓国言語文化学会
- 타니자키 미쯔코(2012)「日本の大学における韓国語文化教育の現状と課題-第2外国語教育としての韓国語教育を中心に-」『言語事実と観点』30 延世大学言語情報研究院
- 하세가와 유키코(2015)「日本の韓国語教育の現状と課題-韓流以降10年間の変化を中心に-」『国際韓国語教育文化財団創立記念国際学術セミナー発表集』

- 1 岡山県立大学語学教育推進室非常勤講師
- 2 박중후(2015)より引用。
- 3 오대환(2010)より引用。
- 4 大学は放送大学を除く国・公・私立大学である。
- 5 2003年から2005年頃の韓国ドラマブームを「第1次韓流ブーム」、2009年から2011年頃のK-POPブームを「第2次韓流ブーム」と言う。
- 6 오기노(2015b)では、오기노(2015a)を引用し、学習者ニーズ分析に関する研究数は、1980年代から2007年まで約25年間で3本、2008年から2014年まで7年間で7本に増えたと述べている。
- 7 日本国内では、外国語検定試験合格者に単位を与えるシステム、つまり韓国語能力試験(TOPIK)の場合、合格者に4~8単位を与える学習システムを取り入れた大学がある。

A Study on Korean Language Education in Japan:
Current Status and Issues in the Study of Korean Language Learners at University

Jinny PARK-CRAIG

In this paper, through the questionnaire survey of the Korean language at Okayama Prefectural University, I studied the improvement of Korean language education method and the direction for learner-centered education. As a method of composing of a new curriculum and learner-centered education, I proposed introduction and utilization of Korean Hallyu content and e-learning and education of language and culture collaboration. Also, I proposed for establishing the utilization of e-learning as learning support content for outside utilization from class, it is important to develop learning support content.

Keywords : general education of Korean language, questionnaire survey, concurrent education of language and culture, Hallyu content

(Okayama Prefectural University part time lecturer)